

【研究紹介】

東アジアにおけるフラワーエコノミーの動向：中国・日本・韓国

新里 泰孝*・裴 光雄**・宮部 和幸***

1. はじめに

研究グループは、国際園芸学会（ISHS : International Society for Horticultural Science）発行のActa Horticulturae 1312誌において以下の論文を発表した。

Y. Niisato, K. Bae, K. Miyabe, Dynamics of East Asian flower economies: China, Japan and Korea,84 (1), pp.515-525, 2021, doi.org/10.17660/ActaHortic.2021.1312.73

2. フラワーエコノミー

フラワーエコノミーとは、フラワーを観賞する顧客から、小売、卸売、生産、種苗（育種）に至るすべての「経済活動」を含む概念である。そして、その経済活動を、消費過程から、流通・加工、生産、育種過程において、登場する多様な主体などの関連・連携に着目し、フラワーの顧客視点を重視しながら、空間的構造として捉えるものである。したがって、生活者などの社会的関心の高まりに伴う新しい消費、療法や教育的・文化的要素なども含意するものと位置づけることができる。

また、フラワーは、他の野菜や果物などの農産物以上に顧客の細かなニーズとその変化を基本としている。フラワーは、嗜好性が強く、贈答、装飾、冠婚葬祭などの多様な用途と場面をもつ。そして、多様な用途と場面によって品目・品種などは細かく異なる。フラワーエコノミーは、こうした顧客の細かなニーズとその変化に依拠している。

フラワーエコノミーでは、単に消費過程から育種過程間での財（goods）の流れに着目するだけでなく、フラワーをめぐる多種多様な主体が密接にかつ複雑に絡み合い、相互に影響し合っている状況、すなわち、多様な主体の連携・結合に着目することを重視している。

いま、こうしたフラワーエコノミーを示せば、図1のように整理することができる。消

*元富山大学（にいさと やすたか）**大阪教育大学（い よんべ）***当学科教授（みやべ かずゆき）

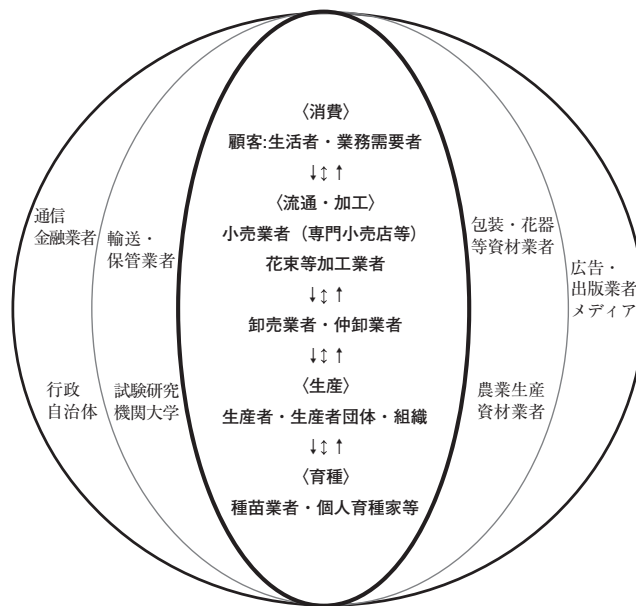


図1 フラワーエコノミー

費、流通・加工、生産、育種過程における主要な事業体を中心として、輸送・保管業者、生産資材業者、金融業者などの関連事業体を含めることができる。

3. 研究内容

2000年以降、東アジアのフラワーの生産と貿易はダイナミックに発展してきた。中国はフラワーの生産、輸出、輸入を大幅に増やし、日本は生産量を減らしてきた。伝統的な輸出国であったタイは、中国とマレーシアに追い越され、韓国は輸入国となっていった。

本研究では、東アジアの3大経済大国である中国、日本、韓国におけるフラワーエコノミーについて詳細に検討を試みた。中国では、日本に比べて鉢物や苗が生産に重要な役割を果たしており、切花や球根の輸入は増加している。2000年以降、日本のフラワーエコノミーは低迷し、依然として輸入大国の一つではあるが、個人消費は伸び悩み、生産者、卸売市場も小規模なままである。韓国では、特に2010年以降、フラワーエコノミーは急速に縮小し、その輸出も減少してきている。さらに、本研究ではニューノーマル経済におけるフラワーの消費と生産についても考察を加え、生産と物流におけるいくつかの問題点を指摘した。

付記：本研究は、「フラワーエコノミー論の構築とチューリップ球根産業の展開」、科学研究費助成事業基盤研究費（C）(15K07623、代表：宮部和幸）をベースとして実施した。